狂言鑑賞のために

大蔵流　山本会

狂言の歩み

　狂言は、室町時代の昔から今日まで、650年も続いた芸能です。ごく初期には、農作業の節目に、神社の祭礼に、市の立つところに、人々が集まって即興的に行われていた、とても素朴な寸劇でした。そのうち、面白いもの、人々の心に残ったものなどが繰り返し行われるうちに、だんだんと形づくられました。まとめていった人は、玄恵法印というお坊さんだといわれています。

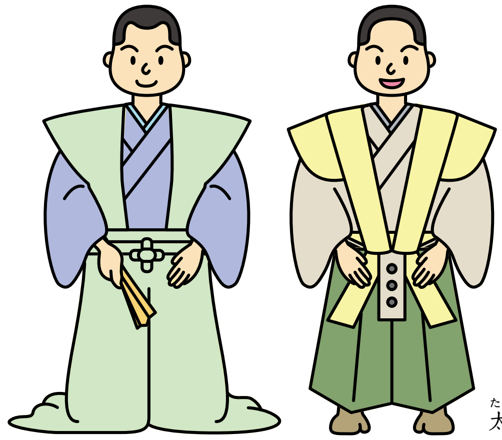
　江戸時代になると、幕府は能楽を式楽（正式な儀式で使う音楽）にしました。それからは、能と狂言が一番として能舞台で演じられるようになり、狂言師たちは禄（給料）を与えられ、専門家として代々厳しい修行が課せられました。

　明治時代になると式楽としての位置づけはなくなりましたが、厳しい稽古を重ねて芸を伝えていく伝統は守られ、今日では世界的に見ても貴重な芸能として、能とともにユネスコの世界無形遺産に認定されています。

狂言とは

　狂言には、歴史上有名な人や、特定の人物は出てきません。私たちの身近にいるような人ばかりで、内容も日常よくあるものです。登場人物は大名（主人。地方の小領主、農村に土着した武士）、太郎冠者（従者。召使）、夫、妻、山伏、僧、動物などです。

　狂言は見て楽しむものです。面白いと思ったら大いに笑い、へんだなと思ったら大いに考えてください。



主人　　太郎冠者

令和５年度　学校巡回公演事業　狂言公演　　大蔵流狂言　山本会

　小学校・中学校等において文化芸術団体による実演芸術の巡回公演を行い、子供たちが質の高い文化芸術を鑑賞・体験する機会を確保するとともに、子供たちの豊かな創造力・想像力や、思考力、コミュニケーション能力などを養い、将来の芸術家や観客層を育成し、優れた文化芸術の創造に資することを目的としています。

　ワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、実演においては、子供たちが参加できる工夫を行います。

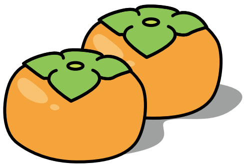
文化庁
舞台芸術等総合支援事業（学校巡回公演）
独立行政法人 日本芸術文化振興会

[柿山伏]

大峰山と葛城山で修行を終えたばかりの山伏が、出羽の羽黒山へ帰る途中のこと。お腹がすいてふと見ると、みごとな柿の木があります。山伏は勝手に木に登って柿を食べはじめました。そこへやってきた柿の木の持ち主。上から飛んできた柿の種に気づいて見上げると、なんと山伏が大切な柿を盗み食いしているではありませんか。さてどうやって懲らしめてやろうか。あれはカラスに違いないと、カラスの鳴きまねをさせます。一生懸命に鳴きまねをする山伏。次はサル、次はトビ。柿の持ち主は「トビなら飛びそうなものだ」とはやし立てます。山伏も決心をして、高い木のうえから「ヒー、ヨロ、ヨロ」と飛んだのですが。

[解説]

修行を積んだ山伏は、普通の人では持ち得ない能力（法力）を持っていると考えられていました。そんな山伏でも、お腹がすくと人のものを盗み食いするものなのです。トビのまねをして柿の木から落ちてしまった山伏。柿の持ち主に、「家まで背負っていって治療しろ」とおどしますが、結局は背中から振り落とされ、法力の無いことまであからさまになってしまいました。



[道具]

桶

ほとんどが象徴的なものですが、なかでも、かずら桶というウルシ塗りの桶をよく使います。酒樽、床几（腰掛）、茶壷、そしてときには樹木の役も果たします。また、桶の蓋は酒盛りのときの盃や茶碗にもなります。

扇はいつも身につけていて、舞の所作に使うほか、扇でお酒を注いだり受けて飲んだりします。またあおいで火を起こしたり、ときにはのこぎりや刀として使うこともあります。

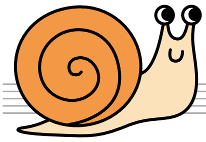
扇

[附子]

主人は外出するにあたって、二人の召使、太郎冠者と次郎冠者に大切な品物をあずけました。主人が言うには、その品物は附子というもので、その方向から吹いてくる風にあたるだけで人間が消えてなくなってしまうというたいへんな毒。でも太郎冠者は中身を見たくてたまりません。そこで二人は風が吹いてこないように扇であおぎながらふたを開けることにしました。そこで見たものはおいしそうな黒砂糖。忠実な召使に嘘までついて出かけた主人への不満もあったのでしょう。二人は黒砂糖をぜんぶ食べてしまいました。さあ、そろそろ主人が戻ってくる時間。このままではひどく叱られてしまうのは目に見えています。そこで太郎冠者は一計を案じました。

[解説]

当時、砂糖はたいへんな貴重品でした。主人はこっそり自分だけで食べようとして、嘘までついて出かけたのでしょうか。主人の弱みをついた太郎冠者。なんて知恵の働く召使でしょう。



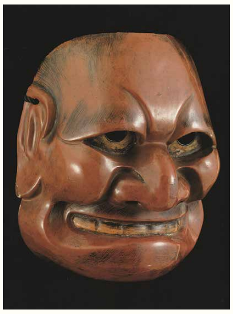
みんなでうたおう♪

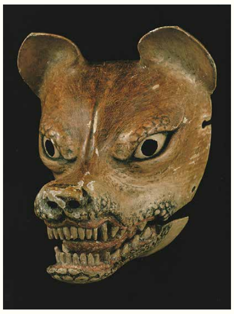
狂言［蝸牛］の謡

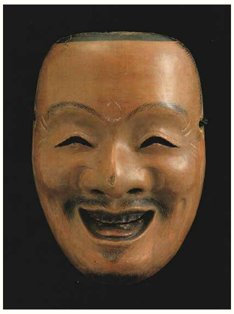
雨も風も吹かぬに　出ざ釜打ち割ろう　出ざ釜打ち割ろう

でんでんむしむし　でんでんむしむし（何度も繰り返す）

雨も降らず風も吹かないとってもいい天気なのに、
顔を出さないなら釜（貝殻）を わっちゃうよ、カタツムリさん





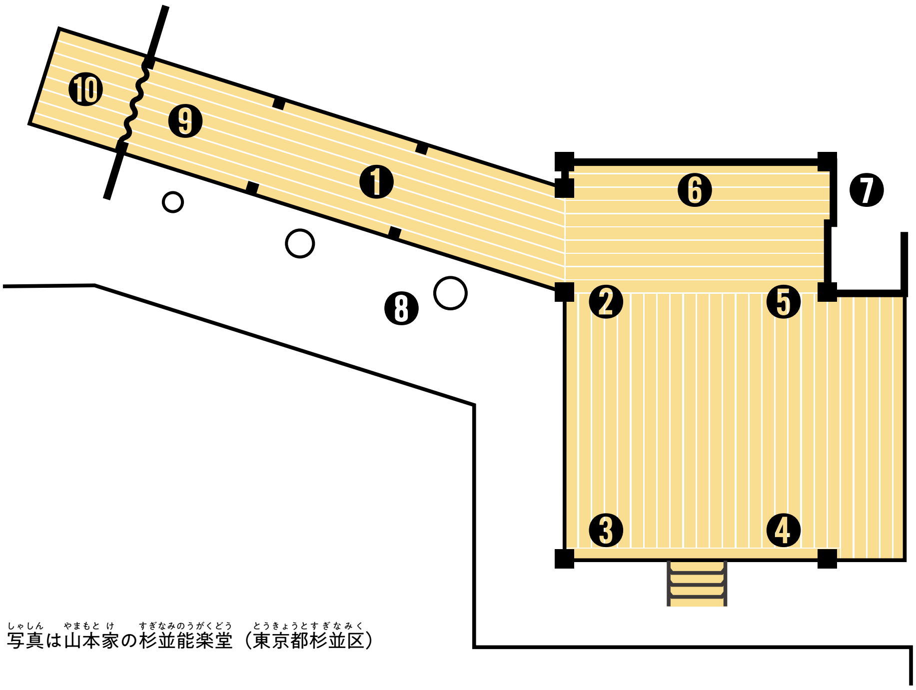


[面]

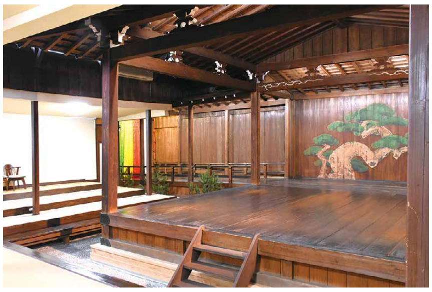
能では面をつけることが大半です。狂言は直面と言って、素顔が大部分ですが、「鬼」「動植物」（狐、狸、猿など）「老人・老女」「神さま」「幽霊」などでは面を使用することがあります。

能舞台を見る

能舞台は、四本の柱に支えられた四角な舞台と、橋掛りと呼ばれる廊下のような部分からできています。屋根があるのは、昔、野外に作られていた名残です。



写真は山本家の杉並能楽堂（東京都杉並区）



舞台から❶橋掛りと❾揚幕へ

舞台から❼切戸口へ

❶橋掛りから舞台へ

舞台の上に作られた屋根

❶ 橋掛り
演者が出入りする通路。舞台の延長として、ここで演技が行われることも多い

❷ シテ柱
シテ（主役）がこの柱の近くに立つことが多い

❸ 目付柱
能面を付け視野が狭くなった演者の目じるしになる

❹ ワキ柱
ワキ（主役の相手）がこの柱のそばに居ることが多い

❺ 笛柱
笛を吹く人（囃子方。楽器の演奏者）がこの近くに座る

❻ 鏡板
老松が大きく描かれている。神が松に宿り、その神に芸能を捧げると伝えられる

❼ 切戸口
地謡（合唱の人）や後見（補助する人）の出入りに使う

❽ 一ノ松・二ノ松・三ノ松
橋掛りの前の三本の松。順に小さくして遠近感を出している

❾ 揚幕
演者が出入りするときに揚げる五色の幕

❿ 鏡の間
揚幕の奥にある大きな鏡を備えた部屋。演者が最終的な身支度をする

団体紹介

大蔵流狂言の山本家は、室町時代に始まった狂言を今に伝える家柄で、東京を中心に活動しています。江戸時代には幕府の正式な儀式の場で狂言を勤めていたので、格調高く、気魄に満ちた芸風を持っています。

Designed by MIO OHASHI

狂言鑑賞のために

大蔵流　山本会

狂言の歩み

狂言は、室町時代の昔から今日まで、650年も続いた芸能です。ごく初期には、農作業の節目に、神社の祭礼に、市の立つところに、人々が集まって即興的に行われていた、とても素朴な寸劇でした。そのうち、面白いもの、人々の心に残ったものなどが繰り返し行われるうちに、だんだんと形づくられました。まとめていった人は、玄恵法印というお坊さんだといわれています。

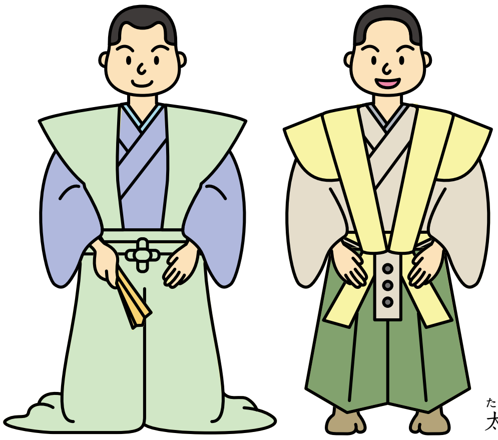
江戸時代になると、幕府は能楽を式楽（正式な儀式で使う音楽）にしました。それからは、能と狂言が一番として能舞台で演じられるようになり、狂言師たちは禄（給料）を与えられ、専門家として代々厳しい修行が課せられました。

明治時代になると式楽としての位置づけはなくなりましたが、厳しい稽古を重ねて芸を伝えていく伝統は守られ、今日では世界的に見ても貴重な芸能として、能とともにユネスコの世界無形遺産に認定されています。

狂言とは

狂言には、歴史上有名な人や、特定の人物は出てきません。私たちの身近にいるような人ばかりで、内容も日常よくあるものです。登場人物は大名（主人。地方の小領主、農村に土着した武士）、太郎冠者（従者。召使）、夫、妻、山伏、僧、動物などです。

狂言は見て楽しむものです。面白いと思ったら大いに笑い、へんだなと思ったら大いに考えてください。



主人　太郎冠者

令和５年度　学校巡回公演事業　狂言公演　　大蔵流狂言 山本会

小学校・中学校等において文化芸術団体による実演芸術の巡回公演を行い、子供たちが質の高い文化芸術を鑑賞・体験する機会を確保するとともに、子供たちの豊かな創造力・想像力や、思考力、コミュニケーション能力などを養い、将来の芸術家や観客層を育成し、優れた文化芸術の創造に資することを目的としています。

ワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、実演においては、子供たちが参加できる工夫を行います。

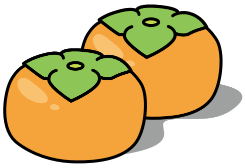
文化庁
舞台芸術等総合支援事業（学校巡回公演）
独立行政法人 日本芸術文化振興会

[柿山伏]

大峰山と葛城山で修行を終えたばかりの山伏が、出羽の羽黒山へ帰る途中のこと。お腹がすいてふと見ると、みごとな柿の木があります。山伏は勝手に木に登って柿を食べはじめました。そこへやってきた柿の木の持ち主。上から飛んできた柿の種に気づいて見上げると、なんと山伏が大切な柿を盗み食いしているではありませんか。さてどうやって懲らしめてやろうか。あれはカラスに違いないと、カラスの鳴きまねをさせます。一生懸命に鳴きまねをする山伏。次はサル、次はトビ。柿の持ち主は「トビなら飛びそうなものだ」とはやし立てます。山伏も決心をして、高い木のうえから「ヒー、ヨロ、ヨロ」と飛んだのですが。

[解説]

修行を積んだ山伏は、普通の人では持ち得ない能力（法力）を持っていると考えられていました。そんな山伏でも、お腹がすくと人のものを盗み食いするものなのです。トビのまねをして柿の木から落ちてしまった山伏。柿の持ち主に、「家まで背負っていって治療しろ」とおどしますが、結局は背中から振り落とされ、法力の無いことまであからさまになってしまいました。



[道具]

ほとんどが象徴的なものですが、なかでも、かずら桶というウルシ塗りの桶をよく使います。酒樽、床几（腰掛）、茶壷、そしてときには樹木の役も果たします。また、桶の蓋は酒盛りのときの盃や茶碗にもなります。

桶

扇はいつも身につけていて、舞の所作に使うほか、扇でお酒を注いだり受けて飲んだりします。またあおいで火を起こしたり、ときにはのこぎりや刀として使うこともあります。

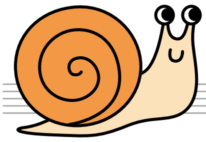
扇

[附子]

主人は外出するにあたって、二人の召使、太郎冠者と次郎冠者に大切な品物をあずけました。主人が言うには、その品物は附子というもので、その方向から吹いてくる風にあたるだけで人間が消えてなくなってしまうというたいへんな毒。でも太郎冠者は中身を見たくてたまりません。そこで二人は風が吹いてこないように扇であおぎながらふたを開けることにしました。そこで見たものはおいしそうな黒砂糖。忠実な召使に嘘までついて出かけた主人への不満もあったのでしょう。二人は黒砂糖をぜんぶ食べてしまいました。さあ、そろそろ主人が戻ってくる時間。このままではひどく叱られてしまうのは目に見えています。そこで太郎冠者は一計を案じました。

[解説]

当時、砂糖はたいへんな貴重品でした。主人はこっそり自分だけで食べようとして、嘘までついて出かけたのでしょうか。主人の弱みをついた太郎冠者。なんて知恵の働く召使でしょう。

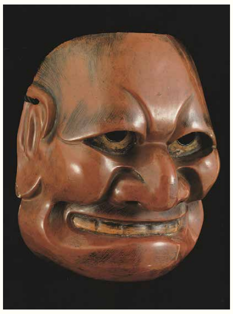
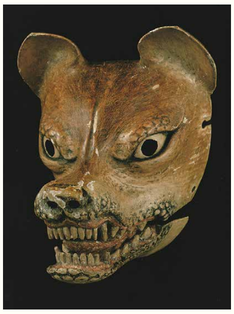
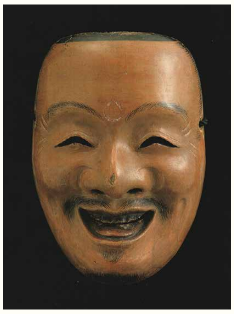


みんなでうたおう♪

狂言 [蝸牛] の謡

雨も風も吹かぬに　出ざ釜打ち割ろう　出ざ釜打ち割ろう
でんでんむしむし　でんでんむしむし　(何度も繰り返す)

雨も降らず風も吹かないとってもいい天気なのに、
顔を出さないなら釜(貝殻)を わっちゃうよ、カタツムリさん

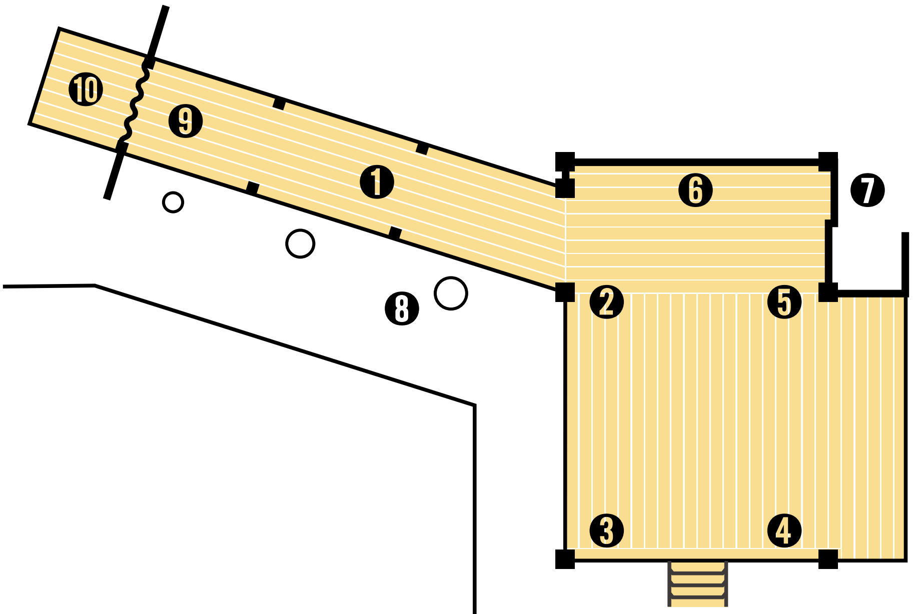




[面]

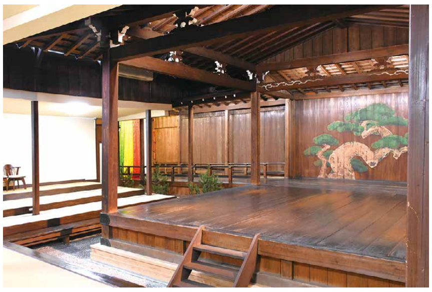
能では面をつけることが大半です。狂言は直面と言って、素顔が大部分ですが、「鬼」「動植物」(狐、狸、猿など)「老人・老女」「神さま」「幽霊」などでは面を使用することがあります。

能舞台を見る

能舞台は、四本の柱に支えられた四角な舞台と、橋掛りと呼ばれる廊下のような部分からできています。屋根があるのは、昔、野外に作られていた名残です。



写真は山本家の杉並能楽堂（東京都杉並区）



舞台から❶橋掛りと❾揚幕へ

舞台から❼切戸口へ

❶橋掛りから舞台へ

舞台の上に作られた屋根

❶ 橋掛り

演者が出入りする通路。舞台の延長として、ここで演技が行われることも多い

❷ シテ柱

シテ（主役）がこの柱の近くに立つことが多い

❸ 目付柱

能面を付け視野が狭くなった演者の目じるしになる

❹ ワキ柱

ワキ（主役の相手）がこの柱のそばに居ることが多い

❺ 笛柱

笛を吹く人（囃子方。楽器の演奏者）がこの近くに座る

❻ 鏡板

老松が大きく描かれている。神が松に宿り、その神に芸能を捧げると伝えられる

❼ 切戸口

地謡（合唱の人）や後見（補助する人）の出入りに使う

❽ 一ノ松・二ノ松・三ノ松

橋掛りの前の三本の松。順に小さくして遠近感を出している

❾ 揚幕

演者が出入りするときに揚げる五色の幕

❿ 鏡の間

揚幕の奥にある大きな鏡を備えた部屋。演者が最終的な身支度をする

団体紹介

大蔵流狂言の山本家は、室町時代に始まった狂言を今に伝える家柄で、東京を中心に活動しています。江戸時代には幕府の正式な儀式の場で狂言を勤めていたので、格調高く、気魄に満ちた芸風を持っています。

Designed by MIO OHASHI